

【DRAFT ONLY】

：本稿は久保明教 2013「人類学機械と民族誌機械——ガタリ記号論からみる現代人類学の展開」（『現代思想』 vol. 41-8（2013年6月号）、172-183頁、青土社）の著者草稿に適宜加筆し、出版社の許可を得たうえで公開するものです。刊行された論文とは記述や頁数表記が異なります。本稿からの引用・転載はお控えください。

本稿では、フェリックス・ガタリの議論、とりわけ彼が展開した独自の記号論と1970年代から現在にいたる文化／社会人類学の展開を重ねあわせながら検討することで現代における両者の射程と可能性を探る。それは、一方では、経験的な調査・分析を基盤とする文化／社会人類学（以後、「人類学」と表記）の展開に照応することで新奇な造語と特異な理論展開に貫かれたガタリの議論を相対化し、その一般的な射程を取り出す試みであり、他方では、部分的な注目を集めつつも十分に理解されているとはいいがたい近年の人類学が含む思想的意義を、ガタリの議論と対応づけることで明らかにする試みである。

ガタリと人類学。議論の対象や用いる概念は多分に異なるものの、両者には、常識的な人間観や近代的な思考のあり方をそのような理解とは異質な人々（精神病患者や世界各地の現地民）の多様なふるまいに依拠することで相対化し批判するという共通の傾向、いわば「多様性による批判」とでも呼びうる知の構えをみることができる。

それだけではなく、以下で示すように、70年代以降の人類学の展開は一見して異質な概念使用や問題構成をとるガタリの記号論に次第に接近していく過程として捉えることができる。両者の重なりあいの中に、私たちは、固有の記号論的分析ツールを備えた「多様性による批判」が展開される場を見出すことになるだろう。

だが同時に、ガタリと人類学が共有する批判的な知のスタンスは、現在においてある種の危機に瀕しているようにも思われる。「ロングテール」というビジネス用語の浸透が示すように、現代の資本主義は、多様なもの、マイナーなものを補足し管理しながら促進することにますます傾倒している。いまや私たちは、ガタリが推進した制度分析における「格

子 (grille)」を用いた実践 (医師、患者、看護師などが病院内で定期的にそれぞれの役割を交換する試み) と似た手法がどこかの IT 企業で用いられていても驚きはしないし、人類学的なフィールドワークが多様化する顧客のニーズを捉えうる新たなマーケティングの手法として注目を集めていることも知っている。多様性を追跡すること、それ自体はもはや何ら革新的なことでも批判的なことでもない。重要なのは、いかなる仕方で多様性を追跡するかであり、そこにおいて批判という契機がいかに賦活されうるのかを探り直すことであろう。以下では、ガタリの記号論と重ね合わせながら現代人類学の展開を検討することによって両者の狭間に「多様性による批判」の具体的な有様を見出し、その上で、こうした批判的な知の構えが現代においていかに有効に機能しうるかについて考察する。

1 記号学を包摂する記号論

ジル・ドゥルーズとの二つの共著によってその名を知られることの多いガタリだが、彼自身の議論の中核となっているのは、70年代に『分子革命』および『機械状無意識』において展開された独自の記号論である。精神分析を資本主義や国家と結びつけながら批判する方法論、顔貌性やリトロネロといった分析概念、スキゾ分析や地図作成という闘争の武器となる語彙。これらの道具立ては、いずれも上記二つの単著を通して練り上げられ、その後のガタリの著作やドゥルーズとの共著の中で存分に活用されている。

まずもってガタリ記号論の特徴は、言語がもつ意味作用を権力の働きとの連関において捉えることにある (特徴1)。例えば、ある男性が部屋から姿を消した後、ドレスを着て戻ってきて「私は性的倒錯者です」と言ったとする。この時、その部屋が性的倒錯者の会合の場であるか、聖職者の会合であるか、あるいは精神病院の一室であるかによって、つまり、いかなる権力が働く場であるかによって、彼の発言はそれぞれに異なる意味を持つ(1)。このように、言語は「それ自体では存在しない」のであり(2)、常にあるタイプの政治的(ないしマイクロ政治的)な権力の作用と結びつくことで特定の意味を産出する。こうした、特定の記号作用を可能にする権力の働く場を、ガタリは「発話(言表)行為の集団的アジャンスマン)」と呼ぶ。

言語の非自律性という主題は、意味作用と権力の密接な結びつきだけでなく、言語が言語とは全く異なる種々の記号と連関することではじめて言語たりうることを含意している(特徴2)。したがって、ガタリの議論は、ソーシャル派言語学やラカン派精神分析などが

展開してきた「あらゆる記号の働きは言語を範例として理解できる」という言語中心主義的な立場と鋭く対立する。彼が依拠するのは、「様々な記号の働きは言語学に依存しない方法によって理解できる」とする C・S・パースに由来する立場である。ガタリは前者を「記号学」(sémiologie)、後者を「記号論」(sémiotique)と呼ぶが、単に前者を否定し後者を肯定するわけではない。むしろ、彼の議論の独自性は後者によって前者を包摂することにある。つまり、あらゆる記号の働きを言語へと還元する(言語によって解釈する)ことが、様々な記号の働きのうちの一つの様態として捉え直されるのである(3)。

記号学を包摂するガタリの記号論は、主に以下の4つの様態に記号を分類することで構成される。(A) 自然的コード化: RNA や DNA、ホルモン分泌など、生物学的ないし物質的に伝達され生産される諸々のコードに規定された記号の働き。(B) 象徴的記号学: 叫びやダンス、儀礼や神経症の発作などに見られる前言語的でイコニックな記号の働き。(C) シニフィアンの記号学: 様々な記号の働きが言語的な意味作用に翻訳され還元される働き。(D) 非シニフィアンの記号論: 数学、音楽、経済、芸術、科学などにみられる、言語的意味作用を持たず技術的かつ実験的に構成される種々の記号の働き。代表的な例としては、グラフや気温曲線や鉄道の運行表など時空間座標を描くことで存在者が存在する条件を形成する図表(ダイアグラム)、後述する顔貌性やリトルネロが挙げられる(4)。

ただし、この4つの記号様態は相互に独立した静的な分類項ではない。むしろ、この分類体系は、異なる記号の働きが常に混合されながら相互に作用していく動的な過程を捉えるために構想されている。例えばDNAによるコード化は分子生物学的な操作の対象となることで優生学的な言説や科学的な記号の働きと結びつき(A \leftrightarrow C、A \leftrightarrow D)、怯えた幼児の叫びは両親による言語的な解釈を誘い(B \leftrightarrow C)、鉄道や工場が生み出した都市生活に固有のリズムをもとに未来派の詩人は錯綜した言葉を紡ぐ(D \leftrightarrow C)。

さらにガタリは、こうした異なる記号間の相互作用のうちに二つの相反する運動を見出していく。第一にそれは、種々の発話行為アジャンスマンを貫く権力の働きを通して多様な記号作用が言語的な意味作用(C)へと還元されていく運動、彼が「シニフィアンの専制」と呼ぶ運動である。その結果、言語は事物を指示するものとなり、実際の言語使用(語用論)に先行する文法的な規則(統語論)が措定され、種々の事物からなる現実の世界とそれらを表象する言語的な記号体系とのあいだの対応関係が樹立される。こうした言語の諸特徴はソシュール派言語学をはじめ記号学的分析の前提となってきたものであるが、ガタリの記号論においては国家や資本主義を支える「シニフィアンの専制」の効果として現

れるものにすぎない。言語以外の記号様態に注目すれば、記号は指示対象なしに機能しうること、記号と物質という区別はあらかじめ措定できないことがわかる。例えば、理論物理学における様々な粒子は、指示対象を持たずとも物理学の記号系のなかで矛盾なく機能する限りにおいて存在が認められる。このようにあらかじめ特定の意味作用をもたず、主体の意識に内属しない様々な記号＝物質の相互作用を、ガタリは「機械状」の無意識と呼ぶ。

種々の記号作用を言語的な意味作用へと還元し、私たちの生きる世界を表象する「まっとうな言葉たち」を生み出すシニフィアンの専制は、非言語的な記号の働きに介入しそれらの相互作用を調整することで可能となる。しかし、だからこそ、非言語的な記号が働く場には、既存の言語的意味作用から逸脱する多様な記号のふるまいを通してシニフィアンの専制が批判され攪乱され転覆される可能性、意味作用を内部から掘り崩すようなマイクロ政治的闘争が展開される可能性が常に認められる。これが、記号論的相互作用の場にガタリが見出す第二の運動である。

ガタリの記号論は、まずもって、こうした二つの運動の相互作用において第一の運動を攪乱し変容させる第二の運動を追跡し活性化させるために構成されている(特徴3)。その具体的な方法論として彼が提示するのが、生成分析と変形分析という二つの契機からなる「スキゾ分析」である。前者は、記号論的諸実践の言語的意味作用への変換を通して既存の発話行為アジャンスマンがいかに維持されているかを分析するものであり、後者は、無意識的な記号の相互作用を通して既存の権力が承認するものとは異なる新たな発話行為アジャンスマンが創設されていく過程を分析し活性化させるものである。いずれの分析においても、重要なのは、言語的な記号様態と非言語的な記号様態の相互変換を促進し異なる発話行為アジャンスマンを接続していく「通過成分」と呼ばれる要素であり、ガタリはそれを「顔貌性」と「リトロネロ」という二つの非シニフィアンの記号として捉えていく。つまり、この二つの通過成分は記号論的相互作用に対するシニフィアンの専制を支える媒体としても、あるいは後者から前者が逃走していく運動の媒体としても働くのである。

2 記号論と人類学機械

以上で検討してきたガタリの議論が展開された七〇年代当時、彼の記号論と人類学的研究との関係は極めて両義的なものであった。

まずもってガタリは、言語中心主義的な記号理解では把握しえない記号様態、とりわけ象徴的記号学の範例として、人類学が記述してきた現地社会の実践にしばしば言及している。具体的には雄牛の死をめぐる一連の儀礼、アメリカ先住民の夜の独唱、アフリカにおけるアニミズム的实践の再興などが取り上げられ、それらは、国家や資本主義を駆動する記号学的意味作用の体制に粘り強く抵抗する記号論的实践として鮮やかに描き出される。

だが同時に、それらの実践に対する人類学者の分析、とりわけ民族誌データの構造主義的な分析に対するガタリの評価は厳しい。構造主義的分析は、現地社会の実践にみられるシニフィアンの専制への抵抗を看過しており、「民族学者たちが、親族関係、神話、政治人類学等を自分たちの構造的解読グリル上に組み入れたのは、まさに解釈上の暴力によって以外の何ものでもない」と彼は述べている(5)。

ガタリの批判は、まずもって、現地社会における様々な記号論的实践を言語学的な記号体系(「構造的解読グリル」)に還元して理解することで、個々の文化を構成する意味の体系やそれらに共通する普遍的な人間のあり方を明らかにしようとする構造主義人類学に向けられている。言語的意味作用を逃れる多様な記号論的实践を分析対象としながら後者を前者に還元しようとするスタンスを弾劾するという点で、それはラカンが推進した構造主義的精神分析に対する彼の批判と同じかたちをとっている。

とはいえ、こうしたスタンスは単に構造主義人類学の特徴であるだけでなく、二〇世紀の文化／社会人類学における基本的な傾向の一つであるとも考えられる。というのも、長期のフィールドワークを基盤として「彼ら(現地民)の視点から彼らの生きる世界を理解し記述する」ことを金科玉条とする二〇世紀以降の人類学において、現地語に習熟した上で彼らの「語り」を収集し、それらを通して彼らが自らの実践をどのように捉えているかを理解することが必須の条件とされてきたからである。

人類学における言語理解の重視は、筆者が別稿において「二〇世紀型の人類学機械」と呼んだものと密接に関係している(7)。ジュルジュ・アガンベンが論じた「^{マキナ・アントロポロジーカ}人類学機械」とは、人間のうちに人間ならざるものとしての自然的な生を見出し、その排除と包含を通じて人間なるものを産出する知的な装置である。アガンベンはこうした「排除されつつ包含されるもの」の系譜を、「アリストテレスの植物的な生」、ピシャの「器質的な生」、リンネの「ホモ・サポエンス」などに見出していく。さらに一九世紀以降の進化論的な発想においては、動物としての「ヒト」から文明的な「人間」がいかに発生してきたのかという通時的な観点において「人間／非人間」の境界が問題とされるようになり、両者をつなぐ

蝶番として「野生児」や「野獣人」と呼ばれる存在が注目を集めるようになる（6）。モーガンやフレーザーなど一九世紀の進化論的人類学者が進化の初期段階を現在でも示している存在として分析した「未開人」もまた、自然（動物）と文化（人間）の蝶番としての役割を担わされていたことは明らかである。

一方、二〇世紀の人類学は、こうした進化論的発想を否定し、個々に独立した価値をもつ複数の文化／社会を詳細なフィールドワークに基づいて分析する学問として現れてきた。だが、人類学機械はその作動をやめたわけではない。むしろ、二〇世紀の人類学を特徴づける文化／社会の複数性というテーゼは、進化論的人類学における自然から文明に至る単一の軌跡を、自然から個々の文化に至る複数の回路に置き換えたものとなっている。人類学者が分析する「彼ら」はもはや自然と文明の蝶番としての「未開人」ではなく、私たち（近代人）と対等な価値をもつ「人間」である。したがって、「彼ら」もまた、人間ならざるものから人間なるものを産出する装置、いわば小さな人類学機械としての「文化／社会」をそれぞれに持っているということになる。それらの装置を個々に精査し、比較分析することによって、自然種としては同一の存在である「ヒト」が多様な文化をもつ「人間」になっていく普遍的なあり方を解明することができるだろう。こうした一連の発想を通じて、二〇世紀の人類学は前世期の進化論的人類学から身を引きはがし、新たな学問体系として自らを確立してきたのである。

人類学的研究が自然（動物）から文明（人間）への移行を可能にする装置として個々の文化／社会を捉える二〇世紀型の人類学機械を基盤としているのであれば、そこにおいて、彼らの言語（現地語）に対する理解が重視されてきたことは何ら驚くべきことではない。というのも、言語的な意味作用を通して他者や世界と関わることは、人間をそれ以外の存在から区別する決定的な要素とみなされてきたからである。様々な非言語的実践を言語によって解釈する（言語に還元する）能力こそが、人間ならざるものから人間なるものへの移行を徴づける。そうであるならば、私たち（近代人）と対等な価値をもつ「人間」たるべき彼ら（現地民）の記号論的実践は、絶えずシニフィアンの記号学によって「排除されつつ包含」されなければならない。現地における種々の非言語的実践は、人類学者が措定する彼らの言語的な意味の体系、およびそれらを比較分析する人類学の理論的な（近代的な諸概念に基づく）言語体系によって二重に還元される。つまり、ガタリの言う「シニフィアンの専制」は言語という観点からみられた人類学機械の働きなのである。このように考えれば、ガタリの批判は、構造主義人類学だけでなく、現地民の実践を言語的な意味の

体系を通して把握しようとする人類学的研究全般に当てはまることになるだろう。

3 ポストモダン人類学とアクターネットワーク論

以上でみてきたように、ガタリが独自の記号論を展開した70年代当時、人類学は彼の議論に貴重なデータを提供するものであると同時に、分析の方法論においては批判の対象になるという両義的な学問領域であった。だが80年代から90年代にかけて、直接的な影響関係はなくとも、人類学はその方法論においてガタリの議論と極めて近い視角を含むようになっていく。

その第一の契機は、ジェイムズ・クリフォードとジョージ・マーカスが編集した『文化を書く』(1986年)に代表される文化概念批判の高まり、「ポストモダン人類学」と呼ばれる研究潮流の勃興である。そこでは、オリエンタリズム批判やポストコロニアル研究、ポストモダニズム批評などを下敷きにしながら、文化について「書く」という行為が問題化されていった。人類学者が著わす民族誌は、他者の文化を客観的に記述したものではなく、特定の歴史的・制度的・政治的な制約のもとで他者を表象するために産出されるテキストであることが繰り返し強調され、同時に、調査の対象たる彼ら(=現地民)自身もまた近代のない人類学的言説を部分的に取り入れながら特定の政治状況のなかで自らの文化を客体化し表象しているという事態が注目されていく。文化について書き、文化について語る、すなわち現地民の実践を言語へ移し替えること自体が、特定の政治状況や権力の働きと連関することで初めて意味をもつものとして捉え直されたのである。

さらに、民族誌において用いられてきた様々なレトリックや記述の技法が、他者を固定的に表象し、私たち(近代人)と彼ら(非近代人)を非対称的に捉えるための方法論として批判され、それらの表現方法を変更することでより他者にかかれたテキストを生み出すことを目指す「実験的民族誌」と呼ばれる試みがなされていった。こうした試みは現在では殆ど見られなくなったが、80年代以降、人類学者が考察すべき領域が、様々な現地民の実践だけでなく、それらを言語へと移しかえる自らの(および彼ら)の実践を含むものとなったことは確かである。

このように、文化を書くこと、すなわち、現地民の諸実践を言語へと変換することに伴う政治性を問題化することで、人類学的方法論は、言語がもつ意味作用を権力の働きとの連関において捉えるガタリの記号論(特徴1)と極めて近い分析視角を持つものとなる。いふならばポストモダン人類学は、人類学的営為に潜在する「シニフィアンの専制」への

寄与を問題化する試みだったのである。とはいえ、その議論は非言語的な記号様態に焦点をあてるものではなく、言語への還元に伴う権力の働きを言語的操作によって解除ないし改変しようとする試み、いわば「シニフィアンの記号学によるシニフィアンの記号学批判」であり、ガタリ記号論の観点に立てばその限界は自ずと明らかだったということになるろう。

人類学的方法論がガタリの議論に接近していく第二の契機となったのは、科学的営為に関する人類学的研究を基盤としながらブルーノ・ラトゥールやミッシェル・カロンの、ジョン・ロウによって提唱されてきたアクターネットワーク論(Actor Network Theory: ANT)の浸透である。プラグマティズムやエスノメソドロジーなど、主に実践論的な学問的蓄積を援用しながら分析手法を形成してきたANTだが、その基盤として挙げられるのは記号論からの影響である。ロウによれば「アクターネットワーク論は、マテリアリティの記号論として理解されうる。それは、存在者は関係をとおして生み出されるという関係論的な記号論の見解を、言語的要素だけでなくあらゆる存在者に適用する」(8)。

ある記号の形態や性質は、それと他の記号との関係を通じて生み出される。この原則を、ANTは人間だけでなく動物や機械などの非人間も含むあらゆる存在に適用する。こうした記号=物質的な存在者が「アクター」と呼ばれ、これらのアクターが取り結ぶ諸関係が「アクターネットワーク」と呼ばれる。各アクターの働きによってネットワークが生み出されると同時に、各アクターは常にネットワークの運動を通して定義され変容していく。このため、アクターネットワークは原理的に著しく流動的で不安定なものであるが、アクター同士の働きが互いに「翻訳」され一連の関係性が「ブラックボックス化」されることでネットワークは安定し、その効果として私たちにとって自明な現実が構成される。

ANTの議論は、人々にとって自明な現実が言語的な意味の体系を通して構成されるという記号学的見解と激しく対立する。むしろ、世界の状態に対する特定の言語的表現が的確であったり不的確であったりするの、それらの表現と非言語的な記号=物質(アクター)がともに織りなすネットワーク状の実践の効果として説明されることになる。例えばラトゥールは、アマゾンの森林における科学者たちの調査に同行し、彼らが森林の状態について分析した報告書の文章が、種々の非言語的な記号=物質(土壌標本、土壌計測器、土壌比較器、方眼紙に描かれる図表など)を適切に配置し連関させる非言語的な実践と結びつく限りにおいて意味をなすことを描き出す(9)。アクターネットワークが運動する只中においては、物質と記号、世界と言語、自然と文化といった二項対立は一切認められず、それらが自明とされうるのはネットワークが一時的に安定化した時のみなのである。

非言語的な記号＝物質が織りなす諸関係を通して現実が構成される過程に焦点をあて、言語的な指示や表象をその副次的な効果の一つとして捉える ANT の実践論は、非言語的な記号が織りなす様々な相互作用と連関することではじめて言語は言語たりうるとするガタリの記号論（特徴2）と極めて近い分析視角を含んでいる。ANT の方法論は、ネットワークが安定化し言語への還元が可能になっていく過程、ガタリの言う「シニフィアンの専制」をいかに批判し改変しうるかという点に関しては十分な道具立てをもたないが、非言語的な記号＝物質の働きを通して現実が構成されていく過程をアクターネットワークという平明な概念によって把握可能にしたことは確かである。

4 民族誌機械の作動

人類学的言説に伴う権力の働きを当の言説への再帰的言及を通して問題化したポストモダン人類学の戦略と、記号学的な問題構成を放棄した上で諸アクターの非言語的な相互作用において現実の構成過程を分析しようとする ANT の方法論は、一見して対極にある。だが対極にあるだけに相補的に働くとも考えられる。つまり、両者の狭間に、人類学的言説を、種々の非言語的実践（現地民の諸実践、フィールドワーカーの身体的実践、民族誌を読む読者の日常生活）と言語的実践（現地民による語り、それらを書きとめ整理するフィールドワーカーの営為、近代的概念を用いた諸文化の比較分析、現地民による自文化の客体化、民族誌を読解する人々の営為）が様々な相互作用を繰り広げる場として捉える可能性が開かれるのである。このように捉え直された民族誌は、単に象徴的記号学の働きに関する貴重なデータを提供するものとしてだけでなく、ガタリの言う四つの記号様態を含み、それらの相互作用を問題化し促進し改変する媒体へと変容するだろう。

こうした可能性を探究し、0年代以降の「存在論的転換」や「ポストプルーラル人類学」と呼ばれる理論的転回（10）を推進してきた人類学者としてまずもって挙げられるのがマリリン・ストラザーンである。

メラネシア（南西太平洋）地域の人々を主な対象としてきたストラザーンの民族誌の特徴は、現地の諸実践を記述することを通して、人類学者が用いてきた「個人」、「身体」、「社会」、「自然」といった近代的な諸概念の変容が試みられることにある。あらかじめ用意された分析語彙によって現地の実践を説明するという一般的な民族誌のスタンスとは異なり、ストラザーンは、メラネシアの諸実践の内にそれらを説明する固有の論理があるという想

定から出発する。そうした論理を近代的な概念を用いて記述するならば、それらの概念は、私たちが通常知っているのとは大きく異なる仕方働くことになる。つまり、人類学が用いてきたな概念体系がメラネシアの非言語的／言語的な実践と結びつくことで攪乱され変容していく、そうした過程を遂行し活性化させる媒体としてストラザーンは民族誌を捉え直したのである（11）。

例えば、パイエラの思春期儀礼を首尾よく終えた若者の「身体」は大きく美しく見えるようになる。だが、それは彼らが生物学的に成長したからではなく、森に赴いてショウガ女と呼ばれる精霊のためにショウガ畑を作り、それにショウガ女が好意的に応えたからである。両者のやり取りは彼らと将来の妻たちの関係においても反復され、そこでもまた、彼らの身体は妻との関係が円滑である限りにおいて大きく美しくなっていく。精霊や妻との相互作用を通じてのみ若者は自らの「身体」の内側にあった能力を開花させるのであり、彼らの「身体」とは社会的な関係をあらかじめ内包したもののなのである（12）。こうした記述を積み重ねることで、「身体」という私たちが慣れ親しんだ言葉が現地における種々の記号論的实践（上の例では若者の体つきという物質＝記号をめぐる儀礼的实践）と結びつき、その意味は変容し拡張されていく。ストラザーンの民族誌記述は、ANTと同じく、人間と非人間（精霊、交換される豚、儀礼の道具など）が織りなす諸関係の動態を通じてメラネシアの現実が生み出されていく過程を追跡するものであると同時に、近代的な概念体系を現地の記号論的实践に感染させることを通じて、ポストモダン人類学が目指したような人類学的言説の批判的改変を自己言及的な言説批判に陥らずに遂行するものなのである。

このようにストラザーンは、メラネシアにおける身体的実践やイメージ、社会関係やそれに関する語り、儀礼に用いられる道具、儀礼と結びついた神話的な語り、それらを説明するために用いられてきた人類学および近代的な諸概念、あるいはメラネシアにおける実践と類比的に捉えうる欧米における諸実践といった様々な要素を複層的に組み合わせ、それらの相互作用に読者が参与することを通して新たな理解や思考を喚起するような媒体として民族誌を構成する。森田敦郎は、こうした民族誌記述のありかたをドゥルーズやモースの機械概念を援用しつつ「民族誌機械」と呼ぶ。ストラザーンにおいて民族誌は、機械と同じく、互いに異質な要素が相互に作用しながら様々な働きをなす複合体なのであり、読者が前提とする近代的な思考のあり方を動揺させ問題化し、彼らが持ち込む様々な関心と結びつきながら異なる反応を喚起する人工物なのである（13）。

以上で検討してきたような民族誌記述のあり方は、非言語的实践が言語的实践に還元さ

れていく運動に抗して前者が後者を攪乱し変容させていく運動を追跡し活性化させようとするガタリ記号論（特徴3）の視角と極めて親和的なものである。とりわけ、人類学的言説の基盤をなす近代的諸概念をそれとは異質な現地の記号論的实践と結びつけることで問題化すると同時に概念の拡張や新たな思考を喚起していく民族誌機械の働きは、ガタリの言う「スキゾ分析」の人類学な展開として捉えることができるだろう。

ただし、こうした民族誌機械の働きはストラザーンの民族誌記述だけに認められるものではない。むしろ、二〇世紀の著名な民族誌のほとんどは、表向きは現地の社会／文化の忠実な記述という体裁をとりながら、互いに異なるモノや地域や概念の複合的な結びつきを生み出し、読者の常識を動揺させ未知の思考を喚起するものであったとも言える。ストラザーンの独自性はこうした働きを民族誌のポジティブな効果として捉え、その効果をより活性化させる方法論を提示してきた点にある。いふなれば人類学的実践は、学問的な正当性を確保する上では常に人類学機械の働きに依拠しながらも、その裏側では、様々な形態と効果をもった種々の民族誌機械を絶えず作動させてきたのである。

5 人称性と比較

ここまで論じてきたように、人類学的実践における人類学機械／民族誌機械の働きがガタリ記号論におけるシニフィアンの専制／スキゾ分析と類比的なものであるならば、次に問題となるのは、それらがいかにして互いに異なる発話行為アジャンスマンを接続しているのか、つまりガタリの言う「通過成分」の働きがどこに見出されるのかであろう。

人類学的実践を駆動する通過成分として第一に挙げられるのは人称性の変換である。これまでの議論でも繰り返し現れてきたように、人類学的言説は常に現地民を表す「彼ら」という三人称代名詞を含んでいる。かつてバンヴェニストが論じたように、一／二人称代名詞が発話状況を構成する不可欠の要素であるのに対して、三人称は発話状況の外部にある「誰か／何か」を指すものであり、客観的な存在者への指示を言い換えた非人称に他ならない（14）。民族誌は、まずもって、分析対象となる人々を「わたし」（筆者）と「あなた」（読者）が構成する発話状況（「私たち」）の外側に位置する非人称の「彼ら」として位置づけ、それによって、分析される「彼ら」と分析する「私たち」という非対称的な図式を確保するのである。

だが、民族誌の根拠となるフィールドワークの場において、「彼ら」は決して三人称の存在ではない。そこで展開されるのは、調査者たる「私」と被調査者たる「あなた（たち）」

との一／二人称的な関係性であり、私の視点にもあなたの視点にも等しく状況を定義する機能が備わっている。この時、調査者にとって将来の読者たる自文化の同胞は、発話状況を構成する力能を持たない非人称の存在にすぎない。目前の事態を把握する枠組みは調査者と被調査者の非言語的／言語的な相互作用を通じてその度ごとに生起しつつ変容し、そのなかで調査者は二つの視点を重ね合わせる様々な方法を身につけていく。この過程こそが、人類学者が「彼ら」について語ることを実質的に可能しているものに他ならない。このように、人類学的実践を支えるフィールドワークと民族誌という二つの契機は、[[あなた（現地民）⇔わたし（調査者）]→彼ら（自文化の成員）]から [[あなた（読者）⇔わたし（筆者）]→彼ら（現地民）] への人称性の変換をひきおこす。その結果、フィールドにおいて人類学者と現地民が構成する様々な発話行為アジャンスマンが、民族誌において人類学者と読者が構成する発話行為アジャンスマンへと接続されるのである。

人類学的実践を駆動する通過成分として第二に挙げられるのは比較の連鎖である。フィールドにはじめて降り立った人類学者は、現地において進展する状況を適切に理解し反応するすべを知らない。彼がまず当てにできるのは——外国語学習の初期段階と同じく——自文化における行動や認識の枠組みとの比較を通して現地におけるそれを学ぶというやり方である。「私たちはあのようにする（言う）が、彼らはこのようにする（言う）」という形式をとる比較は、聞き取りなどの言語的实践に留まらず、食事の仕方や会話時の距離の取り方といった非言語的な実践を通じてフィールドワーカーの身体に浸透していく。村や森や街を歩くときでさえ、自文化の環境で覚え慣れた歩き方の機能不全やその修正を通して人類学者の身体は絶えず比較を行っているのだ。調査が円滑に進み、調査者の身体が現地にフィットするようになると、現地と自文化の差異を焦点とする比較は後景に退き、現地における差異を焦点とする比較が前面化していく。「彼（あの場合）はあのようにしたが、あなた（この場合）はこのようにする」という形式をとる比較を通じて、調査者は現地における諸実践の差異や共通性を認識していく。フィールドを去り自文化へと舞い戻った人類学者は、現地で行ってきた内在的な比較の成果を自文化における行動や認識の枠組みと再び比較し、後者に慣れ親しんだ読者に理解できるように前者を再構成することで民族誌を著すことになる。こうした一連の比較の連鎖を通じて、フィールドにおいて人類学者と現地民が構成する様々な発話行為アジャンスマンが、民族誌において人類学者と自文化の読者が構成する発話行為アジャンスマンへと接続されていくのである。

人称性と比較という人類学的実践における通過成分は、まずもって現地における種々の

実践を民族誌という言語表現に還元することを可能にするものであり、異文化を固定的に表象する人類学機械の働きを支えているものである。だが、ガタリ記号論における通過成分がシニフィアンの専制を支えると同時にそれを攪乱し転覆する契機となるように、人称性と比較という契機は民族誌機械を駆動するものでもある。その具体的な有様を、以下では、ストラザーンと並んで0年代の理論的転回を推進してきたヴィヴェイロス・デ・カストロの「多自然主義」をめぐる議論に即して見ていきたい。

南米の先住民社会を主な調査対象としてきたヴィヴェイロス・デ・カストロは、「パースペクティヴィズム」と呼ばれる現地における思考のあり方を、西洋的な「多文化主義 (Multiculturalism)」とは対照的な「多自然主義 (Multinaturalism)」として描き出す。南米先住民たちの実践において、ある人間の集団が他の存在（他の集団、動物、精霊、道具や食料など）を知覚する仕方は、それらの存在が人間や自らを知覚する仕方とは全く異なるとされる。例えば、人間にとって血であるものは、ジャガーにとってはトウモロコシの発泡酒であるとされる。さらに、種々の動物や精霊は自らを人間とみなしており、人間を動物としてみている。こうした状況は、近代的な多文化主義の見地からは、自然に存在する普遍的な同一物が精神や文化の違いに応じて異なる仕方で認識されるという風に理解されるだろう。だが、先住民の実践において視点の違いを生み出しているのは個々の存在者の身体的な差異である。それぞれに異なる生活様式を通じて作り上げられていく諸身体こそが、世界を異なる仕方で知覚し組織する拠点、いわば複数形の自然を構成する。身体的な差異を考慮しなければ、人間も動物も精霊も等しく世界や自己を認識する力能をもった精神的で文化的な存在（＝人間）なのであり、そこには一切の差異は認められない。したがって、「一なる自然（身体）」と「世界を異なる仕方で認識する複数の文化（精神）」のセットからなる西洋的な多文化主義に対して、先住民たちの実践は「一なる文化（精神）」と「世界を異なる仕方で認識し組織する複数の自然（身体）」というセットからなる多自然主義的な世界のあり方を示しているのである（15）。

こうしたヴィヴェイロス・デ・カストロの議論は、その図式的な明晰さに反して容易に理解しがたいものである。従来的人类学的言説に慣れた者であれば、「多自然主義」とは結局のところ南米先住民たちが世界を認識する仕方（世界観）にすぎないのではないかと言いたくなるだろう。だが、そうした理解は多自然主義を多文化主義によって把握するものにすぎず、同様に、多自然主義の見地から多文化主義を把握することも常に可能である（「あなた方が人間と動物、自文化と異文化を峻別するのは、あなた方がそのように自らの／彼

らの身体を作り上げてきたからに他ならない」。メタレベルにあるはずの枠組み（近代的な思考）がオブジェクトレベルにあるはずの枠組み（先住民の思考）によって把握される、多自然主義はこうしたメタとベタの反転を引き起こす概念なのである。

重要なのは、ヴィヴェイロス・デ・カストロにおいて多自然主義は先住民の実践を的確に表象するための概念ではないということである。むしろそれは、ストラザーンの民族誌が生み出す諸概念がメラネシアの実践を通して変容させられた近代的概念であるように、先住民の実践と重なりあうように変形された多文化主義の姿であると言えよう。こうして多自然主義なる概念は一つの謎として現れ、民族誌機械に接続する読者に様々な反応を喚起し、様々な問い（身体はいかに視点を生み出すのか、科学的営為を多自然主義的に理解することは可能か、人間と動物が共有する精神とは何か……）を生み出していくのである。

このような多自然主義をめぐる議論においては、「私たち（近代人）」と「彼ら（先住民）」を比較する力能が「私たち（の多文化主義）」にも「彼ら（のパースペクティヴィズム）」にも等しく与えられている。換言すれば、非人称の彼らを分析する民族誌記述の場に、「わたし（人類学者）」の視点と「あなた（現地民）」の視点の相互干渉を通じて状況が把握されるフィールドの状況が再導入され、そこにおいて現地民と近代人が比較されるのだ。人称性の変換は、非人称の客体たる「彼ら」から状況を定義しうる「あなた」への再変容として利用され、比較の連鎖は、現地の諸実践を近代的な概念体系において把握するためではなく、前者と結びつけることで後者の意味作用を掘り崩し改変するために利用される。こうして民族誌機械は人類学機械を餌にはめ、その攪乱と改変を試みていくのである。

6 多様性と還元

以上の議論を通じて、ガタリ記号論と現代人類学の重なりあいの中に見出される「多様性による批判」の有様をある程度明確に示すことができたように思われる。端的に言ってそれは、種々のアジャンスマンを横断しつつ多様な記号論的实践を追跡し、それらの相互作用を活性化させ、様々な仕方と言語的实践と接続することを通して、世界を表象する「まっとうな言葉たち」を生み出すシニフィアンの記号学の働きを問題化し動揺させ改変していく批判的営為であると言えよう。

最後に、多様性を追跡することがもはやマイナーな実践ではなくなりつつある現代においてこうした批判のあり方がいかに有効に機能しうるか、という冒頭で示した問いを検討したい。それを考える上で重要なのは、人類学機械（言語への還元）と民族誌機械（言語

の攪乱) の関係をいかに捉えうるか、という問題である。それは、ガタリ記号論におけるシニフィアンの専制とスキゾ分析の関係をいかに捉えうるかという問題に対応している。

伝統的に人類学者が重視してきたのは、所与の言語的体系への還元を可能なかぎり回避しつつ、多様な実践をどこまでも追跡することで既存の言語を攪乱するという戦略であろう。例えばクリフォード・ギアツは、「反=反相対主義」と題する一九八四年の著名な論文において、生物学や心理学や認知科学の議論に基づいて個々の文化的コンテクストに依存しない普遍的な「人間の本性」や「人間の心性」を想定することで文化相対主義を否定する論者に対して苛烈な批判を繰り広げた。ギアツが問題としたのは、反相対主義者が人間像を普遍化する所与の概念体系によって諸実践を把握する還元論に陥っていることである。人類学者が行ってきた／行うべきことは、こうした還元論を回避しつつ様々な地域における多様な現実を記述することで常識的な理解を覆していくことだと彼は論じている(16)。

還元を避けつつ多様性を追跡するこうした批判的戦略は、しかしながら、多様性を追跡し活性化させながら管理し、それらを「まっとうな言葉たち」へと還元する様々な手法を生み出すことで駆動される現在の資本主義的／国家的な運動に対しては有効に機能しない。人類学的手法のマーケティングへの導入に見られるように、それはむしろ、管理すべき多様性をどこまでも追跡しようとする権力の働きを補完するものとして歓迎されるだろう。

こうした状況において批判という契機を賦活するためには、多様性と還元の相互排他的な理解を逃れる必要がある。いかなる民族誌記述も多様な実践を既存の言語へと還元するものであり、こうした還元を行うことではじめて現実の多様性が現れる。ストラザーンの民族誌が近代的な概念体系を攪乱し、ヴィヴェイロス・デ・カストロが多文化主義を多自然主義へと変形する過程において生じているのもまた、還元の回避ではなく、所与の言語体系がそれとは異質な実践を還元させられることで変調をきたし多様な反応を喚起していく運動である。多様性はあらかじめ存在しない。ガタリ記号論に即して言えば、シニフィアンの専制を掘り崩す逃走線はあらかじめ特定の領域に見出されるものではなく、言語への還元のあり方に即してその度ごとに生み出される。だからこそスキゾ分析は生成分析と変形分析をともに必要とするのだ。現代における「多様性による批判」の可能性は、還元の回避ではなく、種々の記号論的実践を追跡すると同時にそれを言語的实践へと接続する多様な還元のあり方を構想し活性化させることによって生み出されるのである。

註

- (1) フェリックス・ガタリ 1981 『分子革命—欲望社会のミクロ分析』 杉村昌昭訳、法政大学出版局、184頁 (=Félix Guattari 1977 *La révolution moléculaire*, Editions Recherches)。
- (2) フェリックス・ガタリ 1990 『機械状無意識—スキゾ分析』 高岡幸一訳、法政大学出版局、23～24頁 (=Félix Guattari 1979 *L'Inconscient Machinique essais de schizo-analyse*, Editions Recherches)。
- (3) ガタリ記号論の論理構成や彼の研究におけるその位置づけに関しては以下を参照のこと。山森裕樹『ジル・ドゥルーズの哲学』 収「補論 スキゾ分析とリトルネロ—フェリックス・ガタリのプルースト論」、人文書院 (2013年6月刊行予定)。
- (4) 本稿で用いた記号様態の4分類は主に[Guattari 1977]に基づくものであり、邦訳では『分子革命』の177～189頁および『精神と記号』(1996 杉村昌昭訳、法政大学出版局)の89頁に対応している。なお、『機械状無意識』(邦訳56頁)における「シンボルの諸変形物」および「図表的諸変形物」は本稿の分類では一括して「非シニフィアンの記号論」に含めている。
- (5) 『機械状無意識』 邦訳64頁。
- (6) ジョルジュ・アガンベン 2004 『開かれ—人間と動物』 岡田温司・多賀健太郎訳、平凡社、7～15頁。
- (7) 里見龍樹・久保明教 2013 「身体の産出、概念の延長—マリリン・ストラザーンにおけるメラネシア、民族誌、新生殖技術をめぐって」『思想』1066、264～282頁、第2節。
- (8) John Law 1999 “After ANT: complexity, naming and topology” in Law, J and J. Hassard (eds.), *Actor Network Theory and after*, Blackwell: 3.
- (9) Bruno Latour 1999 *Pandora's Hope: Essays on the Reality of Science Studies*, Harvard University Press, 24-79.
- (10) 以下を参照のこと。春日直樹 2011 「人類学の静かな革命—いわゆる存在論的転換」『現実批判の人類学—新世代のエスノグラフィへ』 春日直樹 (編)、世界思想社、9～31頁、およびモハーチ・ゲルゲイ & 森田敦郎 2011 「比較を生きることについて—ポストプルーラル人類学に向けて」『哲学』慶応義塾大学・三田哲学会、125、263～284頁。

- (11) [里見・久保 2013] 第三節を参照のこと。
- (12) Marilyn Strathern 1988 *The Gender of the Gift: Problems with Women and Problems with Society in Melanesia*, University of California Press: 116-119.
- (13) 森田敦郎「民族誌機械——ポストプルーラリズムの実験」『現実批判の人類学——新世代のエスノグラフィへ』春日直樹（編）、世界思想社、96～120頁。
- (14) エミール・バンヴェニスト 1983『一般言語学の諸問題』岸本道夫（監訳）、みすず書房、203～216頁。
- (15) Eduardo Viveiros De Castro 1998 “Cosmological Deixis and Amerindian Perspectivism” *The Journal of the Royal Anthropological Institute* 4(3): 469-488.
- (16) クリフォード・ギアツ 2002 「反＝反相対主義」『解釈人類学と反＝反相対主義』小泉潤二訳、みすず書房、59～94頁。